第３期ウィズあかし運営委員会
第５回ウィズあかし専門委員会議事録

2025 年 2 月 28 日（金）18：00～20：00
複合型交流拠点ウィズあかし　8 階 803 学習室

参加者：専門委員　6　名　明石コミュニティ創造協会スタッフ　7　名

１．開会のあいさつ
〈事務局〉
本日はお忙しいところ、ウィズあかし専門委員会にお集まりいただきありがとうございます。
今年度も残すところあとひと月となり、来年度は指定管理の折り返し地点を迎えることとなります。コミ創にとっても大変重要な３年目となりますので、提案事業にも引き続き取り組み、成果を出していきたいと考えております。
専門委員会へは 2023 年 11 月よりご参加いただき、これまでに男女共同参画・市民活動支援・生涯学習といった各テーマについて、さまざまなご議論やご助言をいただきました。
本日は、これまでのご意見を踏まえ、各分野における今後の考え方や方針についてご説明させていただき、さらに委員の皆様からご意見をいただきながら、内容をブラッシュアップしていきたいと考えております。
限られた時間ではございますが、大所高所からのご意見・ご助言をいただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

２．１)本日の趣旨説明
事務局より口頭で第５回ウィズあかし専門委員会の趣旨説明及び配布資料の確認を行った。
２）自己紹介
専門委員６名及び明石コミュニティ創造協会スタッフ７名が自己紹介を行った。
３）これまでの振り返り
事務局よりスライドを使用して、これまでのウィズあかし専門委員会の振り返りを行った。

３．報告
事務局より「これまでのウィズあかし専門委員会をうけて、ウィズあかしの今後の方針や取り組みについて」について、スライドを使用して報告を行った。

４．質疑応答及び意見交換
〈専門委員〉
ウィズあかしの今後の方針や取り組みについて、今から検討しようとしているのは来年度の話なのか、それともこれから数年間の目標なのか。

〈職員〉

指定管理の２期目の２年目が終わろうとしているため、指定管理期間の残りの３年間の議論が出来たらと考えている。

〈専門委員〉

次の指定管理を取るために、提案できる目標をはっきりさせておくことと、あわせてこの１～２年でこういうことを実施したということを、パイロット的に見せられるのが一番いいということか。

〈職員〉

おっしゃっていただいたとおりで、この指定管理２期目の大きな成果といえるような動きは、来年度にある程度形にしておきたいと考えている。そのうえで、次を見据えての４年目、５年目になると考えている。

〈専門委員〉

あかし女性 SOS 総合サポートセンターとの役割のすみ分けや連携はされているのか。

〈職員〉

役割が重なっている部分は多く、両方に同じような相談が寄せられているのが実状である。

〈職員〉

2024 年４月に、あかし女性 SOS 総合サポートセンターが開設され、匿名で悩み相談に応じるホットライン的な電話相談の役割を担うものと想定していた。しかし、明石市と話をするなかで、同センターもこの１年で継続的な面談支援に取り組み始めていることが明らかとなった。

これまで男女共同参画センターでは、電話相談は相談の“入口”と位置づけ、受付時にニックネームまたは名前を伺い、前回の相談内容を踏まえて次の支援を行うなど、継続的な支援が行える体制を整えてきた。このように相談者に対して必要な支援を段階に応じて継続して行えることが、男女共同参画センターの役割であると考えている。

しかし、あかし女性 SOS 総合サポートセンターも継続支援に取り組むようになっており、相談者の立場で考えると、相談先が複数あることはいいことではあるが、両者の役割のすみ分けが次第に曖昧になってきているのが現状である。

〈専門委員〉

女性からの相談内容の傾向などについて、分析したうえで明石市に報告しているのか。

〈職員〉

主訴などを数値として集計し、毎月または四半期ごとに報告を行っている。

〈専門委員〉

女性の悩みは、明石における女性のニーズを示すものであると同時に、地域の課題でもあるといえる。そのため、数値の集計に加えて、年度末に相談員が集まり、「こういう相談窓口があればよい」「こういうサービスが必要」「こうした取組があれば、エンパワーメントやステップアップにつながる」といった意見を出し合い、それらをグルーピングして整理したうえで、明石市に提出できるとよいのではないか。

個人の悩みが可視化され、明石市の施策につながっていくことは、男女共同参画における女性相談の非常に重要な柱であると考える。そのためにも、無理のない範囲で、相談集計から見えてきた社会状況や背景などを添えることができれば望ましい。

また、これだけしっかりと相談事業を担っている状況を踏まえると、相談員の人材育成やストレスケアも、もう一つの柱として文面に追加があればと思う。相談員自身も学びを得ながら、燃え尽きることなく相談室を運営していけるとよいと考える。

提案のあったエンパワーメント支援については本当にいいと思う。

〈専門委員〉

2025 年度の重点方針に「効果測定」とあるが、実際にはどのような取り組みを想定しているのか。

〈職員〉

講座や啓発事業を実施した際に回収するアンケート結果をしっかりと振り返り、次の企画に活かしていくことを考えている。

〈専門委員〉

相談に関しての効果測定については、どのように考えているか。

〈職員〉

相談については、ケース会議などで内容を共有していくとともに、専門委員からご提案いただいたように分析結果が、市の施策に反映されるような動きができればと思う。

〈専門委員〉

あかし女性 SOS 総合サポートセンターとの関係について、職員同士でさまざまなディスカッションを行うような関係性なのか。

〈職員〉

年 2 回、連携会議で集まって情報共有を行っている。また、あかし女性 SOS 総合サポートセンターの職員は、DV センターの職員でもあり、法律相談でも関わることがあるため、情報交換は随時行っている。

〈専門委員〉

南淡路の「学ぶ楽しさ支援センター」では、課題を抱える子どもたちの第 3 の居場所事業を展開しており、その業務は NPO 法人ソーシャルデザインセンター淡路に委託している。ケース会議や教育相談の場には学校の先生方も参加し、不登校の子どもたちの相談支援を行っている。学校の先生方にとって、市教委が関与していることは安心感につながっている。これは男女共同参画センターにそのまま当てはまるとは限らないが、相談者の立場からすれば、どういった連携体制があるのか、市とどのようにスクラムを組んで対応しているのかが見えることで、安心感が生まれるのではないかと感じている。相談内容に応じて適切に振り分け、市と連携しながら機能していることが可視化されることが重要だと考える。

〈専門委員〉

今回の専門委員会では、より高い視座を持つ必要性を感じている。次期の指定管理を獲得することを見据えたうえで、そのために今後１～２年の間に何を行うかが問われている。したがって、これまでの１期・２期で至らなかった点を踏まえ、それを克服しようとする姿勢を示すことが重要なポイントではないかと考えている。

振り返りの中で「アウトリーチ」や「プラットフォーム」という言葉が挙がったが、男女共同参画の視点から、生涯学習や市民活動に対して、どのようなリーチ（連携）を考えているのか伺いたい。

〈職員〉

エンパワーメントの過程において、相談者が「市民活動をやってみたい」「生涯学習に参加してみたい」と思えたときに、その方をつなぐ先としての連携をイメージしている。

〈専門委員〉

そうした連携の実績を、それぞれ各分野１つずつでも作っておくとよいと思う。従来と同じような仕様書や提案書を提出する際にも、１ページか２ページ追加するような感覚で、男女共同参画の視点からこのような実績をつくったと示すことができれば、それだけで十分意味があると考えている。

〈専門委員〉

生涯学習の方針について、全体のイメージは理解できたが、具体的になにを実施するのかが見えにくかった。また、プラットフォームの対象者についても、これまでと同じ人が集まるのか、それとも新しい層を想定しているのか、その点を伺いたい。

〈職員〉

現時点では検討段階であり、これから方針を定めていく予定である。たとえばあかし学研究所については、従来は明石の歴史に関心のある高齢の方々が中心であったが、今後は、明石に最近転入してきたがまちに関心がある人や、自分のテーマを持ち明石が好きというような、少し尖った個性を持つ人々が集う場にしたいと考えている。

〈専門委員〉

現在はプロジェクトベースでの提案となっているようだが、何か参考にしたモデルがあれば、よりイメージが湧きやすい。そういったものはあるのか。

〈職員〉

指定管理２期目を申請した時点ですでにマイあかし学という言葉は打ち出していた。

〈専門委員〉

サマーセミナーのような形をモデルにしているのか。

〈職員〉

それを言うとみんなの学校は、サマーセミナーをモデルにしている部分もある。市民講師による市民主体の学びという点では共通している。また、尼崎市で展開されている「尼崎大学」のように、市民自身が学びたいことを自ら選んで学ぶという空気感は非常に参考になると感じている。

その中でも「あかし学」は、地域学として地域への関心や自治意識を育む側面もある。サマーセミナーのような形式の中でも、地域に特化したテーマを抽出して扱うような構成になれば、近い雰囲気を持たせることはできると考えている。

〈専門委員〉

単一の拠点で学ぶのではなく、「町なかキャンパス」のようなイメージも含んでいるということか。たとえば、パン屋をめぐってその魅力を語る人など、まち歩き的な活動を通じて学ぶことも想定していると感じたが、「町全体が学びの場」であるという考え方でよいか。

〈職員〉

まさにそのようなイメージである。すべての活動に私たちが直接関与するわけではないが、人が集まる機会やきっかけを仕掛け、各所で自然にアクションが生まれるような状態を目指している。

〈専門委員〉

兵庫県立「人と自然の博物館」では 2005 年から地域研究員制度を設けており、「ひとはく生涯学習院構想」のもとで、多くの自然系のアマチュア研究員が活動している。毎年 2 月 11 日には「共生のひろば」でポスターセッションやセミナーが開かれ、交流の場としても発展している。こうした仕組みは非常に面白い。もし関心があれば紹介できる。

〈職員〉

何かに帰属する場所をつくるという視点がひとつのポイントだと思っている。「同じことをやっている仲間」「同じテーマでつながっているメンバー」といった共通点を持った関わりが、単に住んでいるだけではなく、まちとの関係性をつくる。そうした関係づくりの機会が、ベッドタウン的性格のある明石においても、自分とまちとのつながりを考えるきっかけとなり、生涯学習の一つの切り口になると感じている。

〈専門委員〉

地域研究員のような仕組みにはステータス性があり、自分たちが学んだことを発表する機会があることは非常に大きな意義がある。学んだ成果をアウトプットできる場が用意されていれば、自然に人と人がつながっていく。その点は、深く介入しなくても任せておける部分だと考えている。

〈職員〉

「町なかキャンパス」よりも、学んだ成果をアウトプットできる場という意見の方が現時点ではイメージに近いかもしれない。たとえばブックスポットの仕組みがわかりやすい。

これまで、各スポットは個別に活動していたが、「市内に 75 か所ある」と見えるようになったことで、あの人もやっている、行ってみようといった相互交流が生まれ、地域への帰属感が高まった。

あかし学のこれまでの講座は、受講して終わりというスタイルだったが、今後は「面白いことをしている人たちが明石には、いる」という認識を広げ、市内で自然につながる仕組みをつくることが、今後のプラットフォームの方向性ではないかと考えている。

〈専門委員〉

プラットフォーム化を進めた後、その効果をどのように評価するのか。変化の把握ができた方がよいのではないかと思う。

〈職員〉

現状は非常に定性的であり、たとえばブックスポット同士がつながったなどは、噂レベルでは把握できるが、評価という観点ではまだ難しさがある。

〈専門委員〉

最初は楽しい、おもしろいでよいかもしれないが、最終的には何らかの評価が求められるのではないか。

〈職員〉

ネットワークができてつながれたと実感している事例の後追いが出来る手法はあるか。

〈専門委員〉

「つながれた」という声を多く集めるのでよいのではないかと思う。

〈専門委員〉

つながる仕組みづくりという点では、現在参加している「明石市 本のまちビジョン検討委員会」でも、本に関わるプレイヤーをつなぐ場の必要性が議論されている。ブックスポットや、市立図書

館、学校司書などの関係者が交流する機会の創出が求められており、そうした動きと連携できれば、１つの実績にもなるのではないか。

また、市民目線としては、ウィズあかしの情報コーナーやまちナビ AKASHI をよく利用しているが、現状では運用に課題を感じる。特にまちナビ AKASHI は、小学校区によって活用度にばらつきがあり、大久保小学校区などでは掲載数が少ない印象がある。また、広報あかしはイベント情報を探す手段としてよく使われているが、すべてのイベントが網羅されているわけではなく、市民としてはここを見れば明石市内の公的イベントが一通りわかるというような情報の一元化がされることに期待している。

今後は、掲載情報の枠を広げることや、活用されていない団体への働きかけを行うことで、利用件数の増加とともに、成果が数字として見えやすくなるのではないか。

〈職員〉

「あかし子育て応援ナビ」のように、各課から情報を集約し、月ごとにカレンダー形式で発信する仕組みが参考になるのかもしれないと感じた。

〈職員〉

以前、「空の下計画」という、全市的な情報統合を目指す構想があったが、途中で頓挫した経緯がある。

〈職員〉

「空の下計画」の流れの中で、まちナビ AKASHI を、かつてはウィズあかしメンバーズ限定でしか情報発信ができなかったが、現在では誰でも投稿できる仕組みに変更している。ただし、そのことが十分に認知されていないのが現状である。

〈専門委員〉

誰でも投稿ができる仕組みであれば、個人的には活用していきたい。実際、市民の中にはイベントを開催しても人が集まらないと悩んでいる方も多く、投稿を促すことで情報量が増え、まちナビ AKASHI を見る人も増えるという好循環が生まれるのではないか。

〈専門委員〉

投稿された内容は、どのように承認されるのか。

〈職員〉

投稿内容は Kintone というデータベースに自動で送信され、投稿後 1 日程度で内容を確認し、承認をすれば自動的にウェブサイトに掲載される仕組みとなっている。

〈専門委員〉

営利目的のイベントについては掲載不可なのか。

〈職員〉

営利団体が主催する場合でも、公益的な内容であれば承認している。完全な営利目的の事業でない限り、掲載は可能である。

〈職員〉

また、まちづくり協議会からの情報発信について活用状況には確かにばらつきがある。活発に活用しているところもあれば、そうでない地域もあり、それは各まち協の運用意識に左右されている。更新は各まち協が自主的に行う仕組みとなっており、支援はしているが、意識の差が反映されやすい部分でもある。

〈専門委員〉

事務局側の IT スキルの有無も、活用の度合いに影響しているのではないかと思う。

〈専門委員〉

「必要な情報を自ら積極的に取りに行く」という目標は理解できるが、実現するのは難しいと感じている。そこで、市民活動の分野になるかもしれないが、PR チームや PR 部のようなものを立ち上げるのはどうか。たとえば、編集者やライター、カメラマンなど第一線で活躍する人から連続講座を無料で受けられるような機会を設け、実践の場としては「マイあかし学研究所」などで実際に取材や発信を行えるようにする。スタッフが足を運ぶのも一つだが、こうした人材が自ら動き、現場で取材・発掘を行う形も有効だと考える。

また、まちづくりの現場に関わるなかで、頑張り続けることが前提とされ、立ち止まることや一歩引くことが許されない雰囲気を感じている。そうした中で、自分の居場所を見失ったり、身近な人に攻撃的になってしまったりするケースも少なくない。そんなとき、男女共同参画の視点からここが“保健室”のような居場所の役割を担うことができれば、心理的なサポートにもつながるのではないか。たとえば、「そういう人も多いですよ」といった声かけができれば、自分だけじゃないと思えて安心できる人もいるはずである。

〈職員〉

確かに、男女共同参画と市民活動支援の機能を持ち合わせていることは大きな強みであると考えており、その点は今後しっかり PR していきたい。

〈職員〉

話を聞いてあかねカレッジの広報コースの受講生が市民ライターや PR チームにあてはまるのではないかと感じた。これまでは内製的に終わる受講生も多かったので、このような取り組みを通して活動を広げていく人材が出る可能性を感じた。

〈専門委員〉

自分の好きなことを発信できる場所があることは、とても大事だと思う。その意味では、テーマごとのプラットフォームがそうした場になる可能性もあると感じている。

〈職員〉

市民活動の方はどうか。

〈専門委員〉

当初は、自立して活動している NPO や長年活動している団体と連携・協働することを目指す方針だったと思うが、今はそこではないという感覚があるのか。

〈職員〉

そうした団体とつながることは重要だと感じている。

〈専門委員〉

自立した団体と組むべきだという方向でいくのか、それとも巣立っていった団体とは一定の距離を保ち、次の支援対象に注力するという方向なのかによって、取り組み方は大きく変わってくるように思う。アンケートを見ると、ウィズあかしの登録メンバーズの中で活動年数が 1 年未満や 3 年未満の団体が圧倒的に多いことから、実はステップアップ期の団体を支えていくフェーズなのではないかと考える。

〈職員〉

自立していったと言える団体について、それが私たちの関わりによるものなのか、もともと支援を必要としていなかったのかは判断が難しい。ウィズあかし自体も、設立からまだ６～７年と歴史が浅い中で、既に自立していた団体が登録しているケースもある。一方で、現在も助成金セミナーや申請相談などを通して関わっている新しい団体については、活動の継続性や自立性に課題があると感じる場合もある。今後このような若い団体が自立していけるかどうかは、現時点では見通せない部分がある。

〈専門委員〉

活動年数の短い団体ほど、社会や地域への貢献度が高いということか。逆に活動年数が長い団体は、60 代～70 代のメンバーの方が多いと思われるが、生活の延長線上での趣味的な活動をしているという傾向を読み取っているのか。

〈職員〉

まさしくそうである。今回の実態調査では、対象となる団体の母数として、中学校区ごとにあるコミュニティセンターで活動しているスポーツや文化系のサークル団体が多く含まれていたこともあり、活動年数の長い団体が多く、地域への帰属意識も強い傾向が見られた。そこで専門委員にお伺いしたいのだが、市民活動支援センターとしてつながりがない団体と関わりを作っていった方がいいのではないかと仮説立てているが意見を頂きたい。

〈専門委員〉

支援を通じて育った団体は、自立後も繋がり続けることが多い。ただし、用がない人に無理に来てもらう必要はないし、それは資源の無駄遣いにもなり得る。むしろ、今ここを求めている人に対してリソースを投資すべきだと思う。

〈職員〉

今回の調査で NPO 法人の団体リストを見てみると、関わりが全くない団体も多く、そうした団体が面白い活動をしていることを、知れた。

〈専門委員〉

そうした団体と繋がりたいのであれば、講座の講師として招くことで、他の団体とも繋がりやすくなる。講師として関わることで、自分たちにも何らかの役割があると感じてもらえる。場合によっては、生涯学習事業の一環として展開するのも良いと思う。

〈職員〉

専門委員もおっしゃっていたように、いわゆる“カウンターパートナー”的な存在として、自立している団体と繋がることは重要だと思う。そうした団体を見て、他の団体がこんなふうになりたいと思えるような、憧れやノウハウの共有ができる関係性が理想だと感じた。

〈専門委員〉

男女共同参画で開催している講座に、そうした市民活動団体のメンバーを講師として招くのはどうか。男女共同参画推進の担い手として登壇するにはハードルが高いと感じる人も、市民活動の分野があれば講師としての依頼もしやすいし、収入や経験にもつながる。また、新たな学びや出会いが生まれる機会にもなると思う。

〈職員〉

実際に、あかねカレッジという高齢者向け講座の一つで社会を知るというテーマの講座を設け、

日本語学習支援団体に協力してもらった。身近に外国人が増える中、「やさしい日本語」の使い方についての講座を行い、外国人ゲストとのオンライン交流や、料理体験教室なども実施した。生涯学習と市民活動を連携させた取り組みで、効果的だったと感じている。

〈職員〉

起業支援というよりも、小商いとしての市民講師に関する相談が多い。そういった方々を対象に、起業の先輩という形で、男女共同参画事業と市民活動を連携させた講座も実施している。

〈専門委員〉

男女共同参画の視点をもとに、例えばまちづくりにおける「安全・安心」を女性の視点で見直す、災害対策における多様な視点を取り入れる、などの協働は可能だと思う。生涯学習との連携によって、教養や気づきの場にもつながる。また市民活動でのテーマをスタッフが丁寧に拾い、３センターの機能を活かして連携していくことで、運営の意義もより明確になると感じる。

〈専門委員〉

社会教育や生涯学習の講座に必要なのはインセンティブとモチベーションであり、参加する側からしたら、何か学べるお得感がないと人は集まらない。活動歴の長い団体と繋がれないのは、団体が繋がる必要性を感じていないからである。逆に講師として登壇してもらい、若い世代と交わる場を設けることで、自然と繋がりの楽しさを感じてもらえる。

例えば、県が実施している「ひょうごユース eco フォーラム」では、玉津小の小学生が自然環境について調べたことを口頭で説明しており、その姿に強いインパクトがある。このように多様な人がポスターセッションして発信する場こそが、本来のプラットフォームの姿だと思う。

〈職員〉

マイあかし学研究所でも、市民活動団体に限らず多様な発表があることで、それに刺激を受けたり感化されたりすることがあるのではと思った。

〈職員〉

マイあかし学学会は、ちょうど３つの分野が繋がるプラットフォームとして機能し得ると感じている。

〈専門委員〉

「社会包摂」という言葉が広がる中で、これまで市民としてカウントされてこなかった、障害のある方、外国籍の方、不登校の子どもたちなどへの意識が必要。全ての分野で実施するのは難しいが、意識する必要はあると感じる。例えば、障害福祉やフリースクールなど、管轄が異なってもリーチできる資源がある。それらを活かしていく視点が必要だと感じる。

〈職員〉

そうした資源へのアプローチ手法は様々あるが、今年は孤独・孤立対策推進法に基づく国の補助金を活用し、支援団体への新たなアプローチを試みた。これにより、初めてフリースクール団体と関わることができた。他にもブックスポットのように、多様な形で活動する団体（たい焼き屋、精神ケア、個人宅での運営等）があり、そういった多様性に目を向け、アプローチしていく姿勢が大切だと改めて感じた。

〈職員〉

まだ議論できていない部分もあるかもしれないが、時間の関係で今回はここまでと出来ればと思

う。本日はこれまでの 4 回の議論を踏まえ、今感じている課題や今後に向けた考えを共有し、多くの意見をいただくことができた。

男女共同参画に関しては、数値に加えて分析の内容を言語化し、それを市への提案につなげていくことで、施策として活かしていけるのではないかという意見があった。また、効果測定や効果評価の話は、生涯学習の分野にも関わっており、今後、プラットフォームを展開する中で、その後の成果をどう評価するかが問われた。評価の手法としては、数値データだけでなく、参加者のエピソードや声といった情報を拾い上げることが、次の関心や行動につながるきっかけになるという意見があった。また、スタッフだけで情報を取りに行くことには限界があるため、市民を巻き込んだ“特派員”的な動きが重要になる。たとえば、高齢者大学の広報コースとの連携など、より広いエリアで協力・連携する取り組みが必要であるという意見もあった。

市民活動については、多様な団体や先輩団体が持つ視点と、女性の視点を組み合わせることで、新たなコラボレーションが生まれる可能性があるという意見があった。さらに、3 つのセンターを複合的に運営しているウィズあかしの特性を活かし、3 つの分野をつなぐプラットフォームとしての機能を強化していくことが重要である。その際、インクルーシブな視点を取り入れることが不可欠であるという意見もあった。

こうした議論を踏まえ、次年度や次期指定管理を見据えた 3 年目・4 年目に向けて、より実践的な動きにつなげていくことが求められることを感じた。

〈職員〉

今後の流れとしては、3 月 15 日にウィズゆうの中で運営委員会を開催する予定である。そこの場で、この専門委員会でいただいた意見をブラッシュアップしたものを報告する予定である。

5．閉会のあいさつ

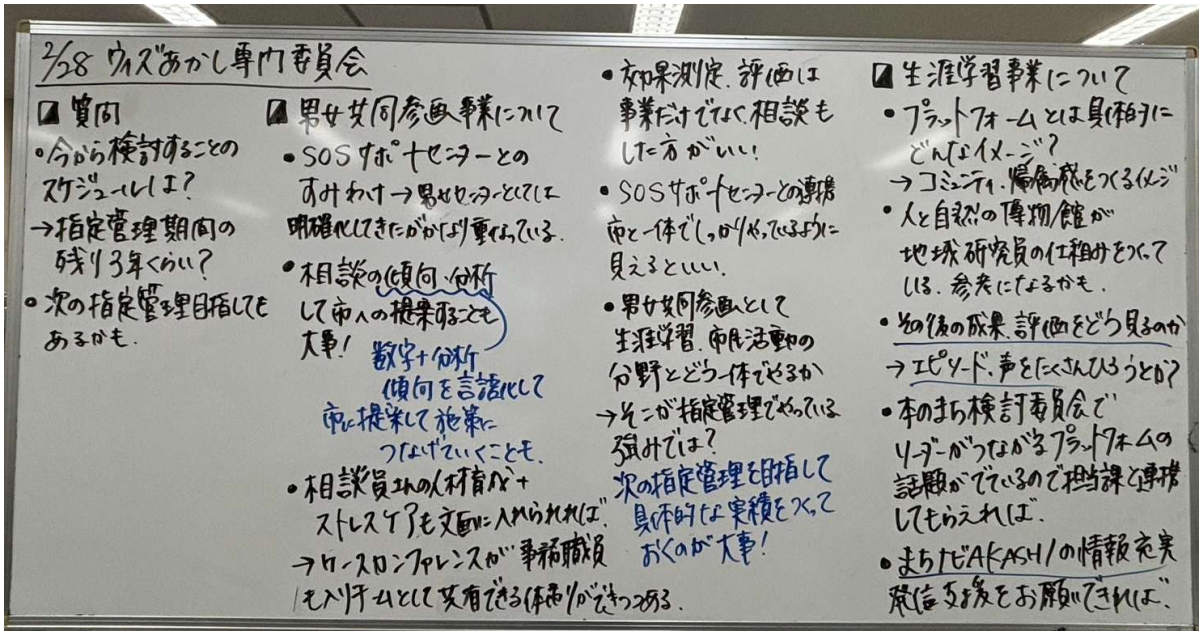
〈事務局〉

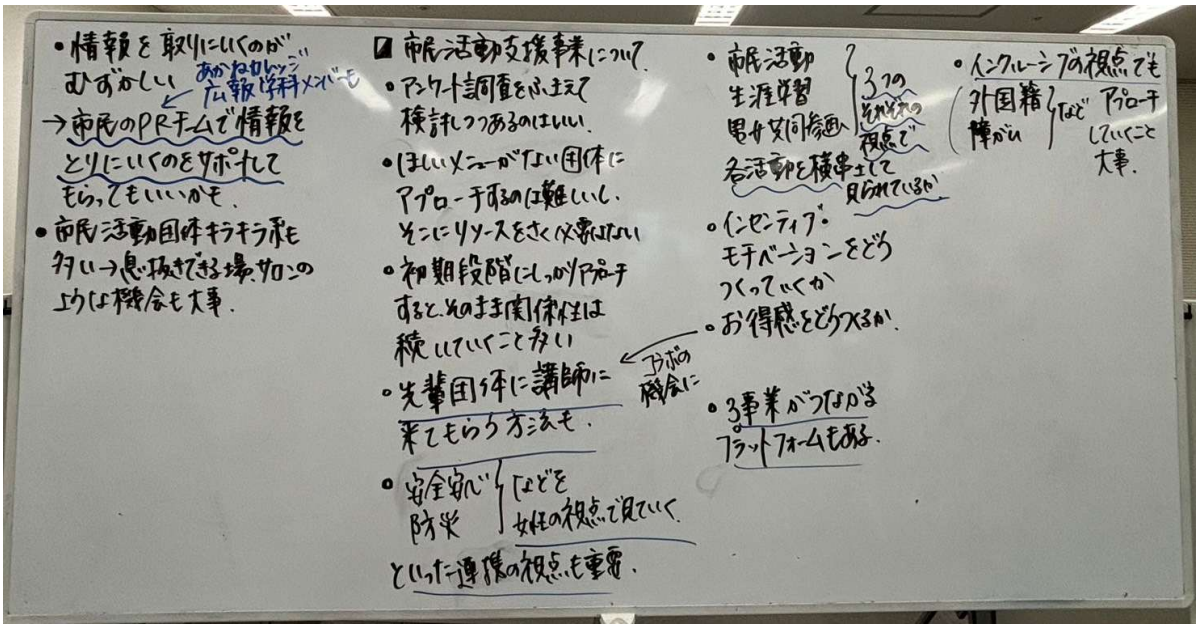
これまで 5 回にわたり専門委員会にご参加いただき、ありがとうございました。原点に立ち返る視点や、多様な観点からのご意見をいただき、大変勉強になりました。

また、職員にとってもリーダーだけでなく担当者も含めて参加できたことが貴重な機会となり、多くの学びと成長がありました。

今後とも、ウィズあかしの運営についてご協力いただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。本当にありがとうございました。

【意見交換まとめ】


2/28 ウィズあかし専門委員会
■質問
・今から検討することのスケジュールは？
→指定管理期間の残り3年くらい？
・次の指定管理目指してもあるかも。
■男女共同参画事業について
・SOSサポートセンターとのすみわけ→男女センターとしてはっきりしてきたからかなり動いている。
・相談の傾向分析して市への提案することも大事！
数字+分析
傾向を言語化して
市に提案して施策に
つなげていくことも。
・相談員さんの人材育成+ストレスケアも文面に入れられれば。
→ケースカンファレンスが事務職員もメンバーとして共有できる体制ができつつある。
・効果測定、評価は事業だけでなく相談もした方がいい！
・SOSサポートセンターとの連携
市と一体でしっかりやっているように見えるといい。
・男女共同参画として生涯学習、市民活動の分野とどう一体でやるか
→そこが指定管理でやっている強みでは？
次の指定管理を目指して具体的な実績をつくっておくのが大事！
■生涯学習事業について
・プラットフォームとは具体的にどんなイメージ？
→コミュニティ、場所の感をつくるイメージ
・人と自然の博物館が地域研究員の仕組みをつくっている。参考になるかも。
・その後の成果、評価をどう見るのか
→エピソード、声をたくさんひろうとか？
・本のまち検討委員会でリーダーがつながるプラットフォームの話題がでているので担当課と連携してもらえれば。
・まちたびAKASHIの情報充実
発信支援をお願いできれば。


・情報を取りにいくのがむずかしい
あかねかレンジ
広報誌メンバーも
→市民のPRチームで情報をとりにいくのをサポートしてもらってもいいかも。
・市民活動団体キラキラ系も多い→息抜きできる場、サロンのような機会も大事。
■市民活動支援事業について
・アンケート調査を踏まえて検討しつつあるのはいい。
・ほしいメニューがない団体にアプローチするのは難しいし、そこにリソースをさく必要はない
・初期段階にしっかりアプローチすると、その後も関係性は続いていくこと多い
・先輩団体に講師に来てもらう方法も。
コロナの機会に
・安全安心
防災
などを女性の視点で見ていく。
といった連携の視点も重要。
・市民活動
生涯学習
男女共同参画
3つのそれぞれの視点で
各活動を横串として見られているか
・インセンティブ・モチベーションをどうつくっていくか
・お得感をどうつくるか。
・3事業がつながるプラットフォームもある。
・インクルーシブの視点でも
外国籍
障がい
などアプローチしていくこと大事。